



259 号  
2020/12

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方  
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



チベット仏教寺院で小正月に豊穰を祈る女性達：この寺はチベット仏教ゲルク派の宗祖ツォンカバが存命中の1500年代初めにギャロン出身の弟子「阿旺札巴」が丹巴に創建した松安寺で、正面仏壇の裏側に380年前に描かれた4体のツォンカバを主題にした壁画が残っています。ギャロンでは格の高い寺で、各地からご利益を求めて参詣に訪れます（四川省丹巴県にて 2015年2月 姑娘山自然保護区管理局特別顧問=大川健三）

‘わんりい’ 2020年12月号の目次は18ページにあります

今月のお話は、史実としてはよく知られていますが、四字成語として日本ではほとんど知られていません。

・>・>・>・>・>・>・

しんかい がくひ  
 秦檜は岳飛の活躍を止めたいと考え、東窓の下で妻の王氏と相談しました。王氏は言いました：「虎（岳飛）を捕まえるのは簡単ですが、彼を（一度）釈放した後、また捕まえるのはとても難しいですよ」

そこで秦檜は、決心して岳飛を殺してしまいました。その後秦檜は西湖で遊んでいる時、船の中で急に病気になる高熱が出て、寝込んでしまいました。寝ている間に、長いマントを羽織った人が出てきて大声で言うのを聞きました：「お前は国と人民のために大変な害を及ぼしたから、神はお前をとっ捕まえる役人を派遣したぞ」秦檜は家に帰ると間もなく死んでしまいました。王氏は祭壇を設け、道士に厄払いを依頼しました。道士の一人が気を失って、その間に秦檜が鉄の首枷をはめられて、ありとあらゆる攻め具で厳しく罰せられているのを見ました。秦檜は道士を見ました：「道士様、どうぞ私の妻に伝えてください。『東窓で岳飛を殺す相談をしたことはすっかり暴露されてしまっている。隠しても無駄だ』」と。

・>・>・>・>・>・>・

**言葉の意味**＝東窓事发：陰謀がばれる、或いは秘密が暴かれるの意。

**使用例**＝公金を横領したことが、何時かばれるのではないかと、毎日びくびくして暮らしている。

・>・>・>・>・>・>・

かんう  
 岳飛は関羽と並んで、中国の人々から敬愛され

る宋代の英雄であることは皆さんご存じのことでしょう。たまたま今月の「中原雑感」で村上直樹氏が「岳飛廟」のことを紹介し、写真も見せてくださっています。

30年も前で、どこでだったのか記憶が定かではないのですが、私の見た銅像は、秦檜と妻の王氏が鎖につながれ、這いつくばっていました。人々は岳飛に対する敬愛の念を、秦檜夫婦に対する憎しみに置き換えて、ことさらにみじめな像を納得して見ていました。昔は唾を吐きかけられ、時には放尿されることもあったようですが、見学した時には銅像の周りに柵がめぐらされ、「唾を吐きかけないでください」との立札がありました。

この岳飛と秦檜のお話は、日本でもかなりよく知られていますが、それにまつわるこの四字成語、



挿絵：満伯画伯

日本の四字成語辞典ではほとんど取り上げられていません。因みに、中国ではこの「東窓事发」の代わりに同じ意味で「東窓事犯」もよくつかわれるようです。日本語であえて言えば、「壁に耳あり、障子に目あり」ということでしょうか。

秦檜の政治的姿勢、つまり金と講和条約を結んだことに対する是非は、時代が変われば評価もいろいろで、戦争を避けるために豊かな経済力を使ったもので、政治家としては許容範囲であるとの解釈がされることもあるようです。

政治としてはともかく、自分の利益を図ったり、敵対する人間の罪をでっちあげて死刑にするなど、人間性に卑しいところがあるので、世の中では受け入れられないのでしょう。

# 王維の五言絶句二首

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

今回は王維の詩を和訳してみましよう。

[訓読]

雑詩

王維

君故郷自り来る  
應に故郷の事を知るべし  
来日綺窓の前  
寒梅花を著けしや未だしや

[訳詩]

故郷の村から来た君は  
故郷の事がわかるだろ  
来るとき庭の窓わきの  
寒梅の花、咲いてたか

王維は李白、杜甫と並ぶ盛唐三大詩人の一人です。後世、李白が「詩仙」、杜甫が「詩聖」と呼ばれるのに対して、「詩仏」と称されました。若くして科挙に合格しエリート官僚の道を歩みましたが、一方では幼い頃から母親の影響を受けて深く仏教に帰依し、詩の世界に禅の境地を切り開いた詩人でもあります。

「雑詩」とは、テーマやスタイルに拘らず心の趣くままに作った詩という意味です。ただこの詩からは作者の故郷への思いがそこはかとなく伝わってきます。

[原詩]

雑詩

王維

君自故郷来  
应知故乡事  
来日绮窗前  
寒梅著花未

[訓読]

元二の安西に使用するを送る

王維

渭城の朝雨軽塵を浥おす  
客舍青青柳色新たなり  
君に勸む更に尽くせ一杯の酒  
西のかた陽関を出づれば故人無からん

[訳詩]

渭城の館雨晴れて  
目に沁む朝の柳の青葉  
いざ飲み干さん名残りの酒を  
陽関越ゆれば友なき旅路

原題は「送元二使安西（元二の安西に使用するを送る）」。

後世、多くの人がこれに曲を付けて歌うようになったので『陽関曲』または『渭城曲』とも呼ばれています。日本では詩吟の定番の一つになっています。

渭城とは咸陽の別名で、西域に旅立つ人々を見送る惜別の地でもありました。陽関とは敦煌の西方にある関所のことで、そこから先は専ら異民族の居住地でした。安西とは現在の新疆ウイグル自治区一帯を指します。唐王朝はこの地に安西都護府を置き、西域支配の拠点にしていました。元二は王維の親しい友人の呼び名であったと思われませんが、詳細は不明です。

[原詩]

陽関曲

王維

渭城朝雨浥轻尘  
客舍青青柳色新  
劝君更进一杯酒  
西出阳关无故人

おうぼつ としやうふ にん しょくしゆう ゆ おく  
**王勃の『杜少府の任に蜀州に之くを送る』**

報告:花岡風子

今日のお題は、初唐の詩人。王勃の「杜少府の任に蜀州に之くを送る」でした。

王勃は、初唐の詩人で、650年生まれ(諸説あり)。杜甫の生まれる62年ばかり前に山西省の儒家で生を受けました。祖父は儒者の王通です。「現代の日本では必ずしも知名度が特に高いとは言えませんが、古くから親しまれてきました。『唐詩選』には今回取り上げた詩を含めて3首採録されています。現存する詩は76首。早熟の天才で、26歳前後で亡くなっています。日本の石川啄木を思わせる早世詩人ですね。」と植田先生。

16才にして科挙に合格、沛王府修撰(王族の歴史編纂所)に勤務していましたが、王族間で争われる鬪鶏を応援する為に、戯れに書いた檄文が高宗の怒りに触れ、謹慎処分を受けて四川の成都に飛ばされます。この3年ほどの期間に大量の創作活動を行なったようです。長安に帰ったあと、虢州(河南)参軍(軍の下級管理職)に復職、赴任しますが、今度は官奴(公費で雇われた下僕)を殺したかどで官吏の資格を奪われてしまいます。さらに不幸なことに、この事件に連座して、父の福時も遠く交趾(ベトナム北部)に左遷されてしまいます。そして、その父をたずねていく途中、(或いは、父に会ったその帰りという説もありますが)海難事故で命を落とします。満26才、あるいは27才の若さだったこととなります。

早世の天才詩人を惜しむ後世の者としては、事故死がせめて父に会った後であったことを願わずにいられませんね。しかし、何という不連続きの人生だったことでしょうか。最初に左遷されたときも、王族たちの間で流行っていた鬪鶏に際し、檄文を書いて王子達の対立を煽った、というわけの分からないような罪状で飛ばされていますし、殺人事件も、若くして天才的な振る舞いが多かった

ために妬まれた上での畏だったとか、諸説あるそうです。

短い生涯ながら五言律詩を中心に多くの作品を残しました。その中の代表作品が『送杜少府之任蜀州』(杜少府の任に蜀州に之くを送る)です。

sòng dù shào fǔ zhī rèn shǔ zhōu  
**送杜少府之任蜀州**

wáng bó  
**王勃**

|                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| chéngquè fǔ sān qín | fēng yān wàng wǔ jīn  |
| 城阙辅三秦，              | 风烟望五津。                |
| yǔ jūn lí bié yì    | tóng shì huàn yóu rén |
| 与君离别意，              | 同是宦游人。                |
| hǎi nèi cún zhī jǐ  | tiān yá ruò bǐ lín    |
| 海内存知己，              | 天涯若比邻。                |
| wú wéi zài qí lù    | ér nǚ gòng zhān jīn   |
| 无为在歧路，              | 儿女共沾巾。                |

としやうふ にん しょくしゆう ゆ  
 杜少府の任に蜀州に之くを送る

王勃

じやうけつさんしん ほ  
 城阙三秦を輔し  
 ふうえん ごしん  
 風煙五津を望む

おmoi  
 君と離別の意

こ かんゆう  
 同じく是れ宦遊の人

かいだい  
 海内知己存し

てんがい ひりん ごと  
 天涯比隣の若し

な な きろ  
 為す無かれ岐路に在りて

じ じよ とも きん うるお  
 儿女と共に巾を沾すを

意味をみてみましょう。少府という役職についている杜という友人が蜀州(四川)に赴任するのを見送る、というのが表題の意味です。「之任」は、赴任するという意味です。この友人が具体的に誰を指すかは不明です。

## 首聯

「城阙」とは都の宮殿のことです。「三秦」とは長

安付近の中心地域をさします。秦朝滅亡時に、項羽が首都咸陽を取り巻く地域を三つに分け、秦を打倒する際、秦から寝返って功績のあった三人の武将にそれぞれの地域の治安を任せただけから、三秦と呼ばれるようになったそうです。この句は平仄を合わせるために、語順をひっくり返していますが、意味は三秦の地が都長安の宮殿を取り囲むようにして守っている、ということです。帝都の地形を示しています。

「風烟」とは霧もやや霞もやのことです。「五津」とは、四川省を流れる岷江みんこうの代表的な五つの波止場を指します。この聯では、快適で安全な都を離れて、遙か遠く霧もやにかすむ赴任先の蜀の地へ赴く多難な道中を暗示しています。

### 頷聯

「君」とは赴任して行く友人杜少府を指します。「宦游人」とは、遠く故郷を離れ、左遷や転勤を運命づけられた役人の身の上を表わす言葉です。この聯では同じ宿命を背負った友人への同情を表しています。「宦」とは役人のこと。「游」には故郷を離れるという意味があります。

### 頸聯

「海内」とは四海の内、中国全土を表わす言葉です。「天涯」とは天の果て、遠隔の地を表します。「比邻」とは近隣のことで、この聯の意味は、どんなに遠く離れたところにも心を通わす友人は必ずいる、みんな隣同士のようなものだ、ということです。たった一人で赴任していく友人に対する慰めの言葉です。ちなみに『論語』には「四海之内皆兄弟也」(四海の内皆兄弟けいていなり)という言葉があり、現在では世界中の人はみんな仲良くすべきだ、という意味で使われますが、元来、失意の友人を慰める言葉として使われています。

### 尾聯

「无为」(無為)とは、～してはいけない。ここでは禁止を表わす言葉として使われています。「儿女」(兒女)とは、本来の意味は「儿」が息子で「女」

が娘ということですが、一般には未成年の男女、少年少女という意味で使われます。ちなみに「儿女之情」とは若い男女の恋愛感情のことです。「沾巾」は涙がハンカチをうるおす、つまり激しく泣くことです。この聯の意味する所は「別れに涙は禁物」ということでしょうか。

この詩がいつ書かれたか定かではありませんが、おそらく作者自身が左遷の苦い経験の後、都に帰され、そこで自分と同じように、同じところに左遷され、同じような苦難が予想される友人を慰めるために作ったものかと思われます。

「この広い中国全土、どこへ行こうと心を通わす友人がいて、みんなお隣さんのようなものだよ」と言われても、世の中そんな甘いものではないことを一番よく知っているのは作者自身です。そのことを解った上で、やはり慰めの言葉を掛けずにはおれなかったのでしょう。送られる友人も同じ思いであったに違いありません。作者のその気持ちが解るからこそ友人は涙をこらえることが出来なかったのでしょう。

「子供じゃあるまいし、そんなに泣くんじゃないよ」

これが送る側として最後、精一杯の励ましでした。

しかし、この後の人生、この数倍も悲惨な結末が待っていようとは、この時作者自身、知る由もありませんでした。この講座では、作者自身の人生を知ったうえで、詩を鑑賞しますので、わずか五十文字から、まるで映画のようにいろんなシーンが浮かび、感情を揺さぶられます。

様々な人生に共感するには、各々の体験が必要です。より多くの体験をするためには、より多くの時間が必要なわけで、深く詩を鑑賞するには、年齢を重ねる方が良いのだなあ、と。

来年からはアラフィフ女子になる自分に言い聞かせている今日この頃です。

## 中国の歴史を彩る美人百花 (5)

傾国傾城の美女～末喜(夏)・妲己(殷)褒姒(周)

寺西俊英

今回は、傾国・傾城の美女について書いていきたい。各王朝に傾国傾城の美女はいたと思うが、ここでは紀元前の有名な末喜、妲己、褒姒の三人について見てみたい。紀元前と言えば西施もすぐ名前が出て来るが、すでに紹介したので割愛する。

まず傾国・傾城の言葉の出所から見てみよう。これは後漢の歴史家であり文学者の「班固」が著した「漢書」の外戚伝にある「孝武李夫人伝」の佳人歌という漢詩から来ている。次の詩である。

北方有佳人（北方に佳人あり）

絶世而独立（世を絶ちて独立す）

一顧傾人城（一顧すれば人の城を傾け）

再顧傾人国（再顧すれば人の国を傾く）

寧不知傾城与傾国

（いづくんぞ傾城と傾国を知らざらん）

佳人難再得（佳人は再び得難し）

詩の作者は前漢の第7代皇帝の武帝（BC156～BC87）の宮廷付楽士であった「李延年」である。実は彼には妹がおり、何とか後宮に採用してもらおうと武帝に売り込んだのである。その時の詩である。（この詩については、わんりい 215号（2016年7月発行）に花岡風子さんの名解説が掲載されている）兄の強力な推薦が功を奏して妹は無事後宮に入り、男子一人を生んだが早世した。そのため彼女は傾国にはなり得なかった。武帝が彼女を見てすぐ側室にしたのであるから、やはりかなりの美女であったに違いない。彼女は孝武李夫人として後世に名を残すことになった。

まず《末喜（ばっき）》から紹介しよう。彼女は中国の歴史の最古の王朝である「夏王朝」の第17代王である「帝桀」の妃である。（末喜は、妹喜と表記されることもある）夏王朝はBC21世紀頃～BC16世紀頃で、初代王は治水の神様と崇められ

た「禹」である。彼女が生きた時代はBC16世紀末なので今から3千6百年前である。孔子が生きた時代より更に千年以上前で長い歴史にただただ驚嘆するしかない。末喜は、山東の有施氏の娘であるとされ「帝桀」が有施氏を討った際に降伏の印に献上された。「帝桀」は大いに気に入って彼女の為に傾宮という壮大な宮殿を建て、落成時には大宴会を催したという。この末喜は絹を裂く音が好きだったため帝は彼女の為に国中の高価な絹を集めた。いつの王朝も建国の王は立派であるが、10何代も続けばこのような暗愚な皇帝が即位するのは世の習いである。帝は国政を顧みず彼女が喜ぶことばかりして世も乱れ遂には殷の湯王に攻め込まれ夏王朝を滅ぼした。「帝桀」は、末喜を連れ南巢（安徽省巢湖市あたりか？）へと落ち延び生涯を終えた。夏王朝に次ぐ殷王朝を開いたのは、夏を滅ぼした「湯王」である。

話は横道にそれるが、紀元前で、「禹王」、「湯王」それに後段に登場する周の「文王」と「武王」は聖王として名高い。それぞれ建国に深く関わった王である。「禹王」は以前わんりいに寄稿したので、ここでは「湯王」のエピソードを紹介したい。四書の内「大学」に書かれている内容である。湯王は、自己を律する方法として洗面器に次の九文字を彫り込んで、毎朝洗面するたびにその文字を見て心に刻み政治に臨む覚悟を新たにしたという。その内容は——《苟日新、日日新、又日新》（誠に日に新たに、日に新たに、また日に新たなり）建国の気概が伝わってくるようだ。

では次の傾国傾城の美女《妲己（だっき）》に移ろう。妲己の姓は「己」で、妲は字である。この時代は、女性は字を先に姓を後に書く風習があった。この美女は夏王朝の次の殷王朝を破滅に導いた。殷は約500年の中で30人の皇帝が即位した。その



殷の妲己と孫悟空：『北斎漫画』から。九尾の狐が化けた姿として描かれている。（「小樽しりべしシニアネット(OSS)」より）

30代目が紂王（帝辛）という。紂王の即位9年目に後宮に入った「妲己」に目を奪われ側室としたが、以来王の政治のブレーキが利かなくなった。池の中に酒を入れ、周りの木々に動物の肉をかけた。そこで裸の男女に鬼ごっこをさせるなど、正に「酒池肉林」の騒ぎをさせ自らは妲己を侍らせて毎夜楽しんだそうである。あまりのことに諫言する家臣に「炮烙の刑（油を煮えたぎらせた大なべの上に油を塗った棒を渡し、その上を渡らせて足を滑らせた家臣が大なべに落ちるとい刑）」を課すなど、残虐の限りを尽くした。ついに周の「武王」は、有名な太公望や周公丹（文王の四男）らの助力を得て「牧野の戦い」で殷王朝を滅ぼした。「武王」の父を「文王」と言うが、文王は周の国の基礎作りを行い息子の「武王」の時、「周王朝＝西周」が始まった。この二人の王が前述のように聖王と崇められた。紂王は、最期は贅を尽くして建てた「鹿台」という名の御殿に上り焼身自殺をした。妲己は、紂王が自殺すると武王により首を切られ旗に架けられた。夏王朝の「桀」と殷王朝の「紂」は暴君の代名詞となり、「夏桀殷紂」という言葉にもなった。

最後に登場する傾国傾城は、《褒姒（ほうじ）》である。褒姒の「褒」は褒の国の意味である。姒は姓である。つまり〈褒の国出身の姒さん〉であり、周の国の第12代皇帝・幽王の妃である。周はBC11

世紀頃「武王」から始まったが、褒姒によって本当に国が傾き滅びるかと思われた。

幽王には「申后」という皇后がいた。幽王が即位（BC781年）して三年後、後宮に入った褒姒を見て彼女に身も心も奪われることになった。しかし彼女は絶世の美人であったが、幽王が何を言っても何とか笑わせようとしても笑わない女性であった。ある時外敵が攻めて来るとい報に接し、合図の烽火を上げさせ太鼓を打ち軍勢を集結させた。ところが何事も起こらず困惑する将兵を見た褒姒は、初めて笑ったのである。喜んだ王はそれ以降何も無いのに彼女の笑顔を見たいばかりに何度も烽火を上げさせた。何度も無駄足を踏まされた彼らはいつしか烽火を見ても集まらなくなったのである。そのうちに褒姒との間に男子が誕生した。すると幽王はあろうことか皇后の「申后」とその間に生まれ太子に立てていた「宜臼」の二人とも廃し、褒姒を皇后に、太子には褒姒との間に生まれた「伯服」を立てた。日頃政治をないがしろにし、娘の「申后」を廃された皇后の父の「申侯」は怒りを露わにし、蛮族の犬戎の軍と連合し反乱を起こした。そして幽王と「伯服」を西安の東にある驪山の麓に追い詰め殺害した。褒姒は犬戎（中国西部の遊牧民族）に連れ去られた（BC771年）。

幽王の死後、都から離れていた廃太子となっていた「宜臼」を呼び戻し「平王」とし、王都の镐京（西安市）は破壊されていたため東の洛邑（洛陽）に遷都した（BC770年）。これを「周の東遷」と呼び、以降「東周」と呼び、それまでを「西周」と呼ぶ。

これまで、夏、殷、周（西周）それぞれの傾国傾城を見てきたが、三人の傾国ともエピソードはよく似ていることから、桀（殷）の事蹟が不足しているため後代の文献の中から流用したという説もある。何しろ今から3千年から4千年前の出来事なのでどこまで正しいものなのか、という疑問は拭いきれない。（続く）

## 中国歴史小説と開封・大相国寺ほか

文と写真＝村上直樹

前回話題に取り上げた『三国志』（実は『三国志演義』）には史実ではない作者・羅貫中の創作になる部分が多いそうである。出だしの劉備、関羽、張飛による「桃園の契り」からして史実ではないというのには少しがっかりする。とは言え、中国四大小説の中では、『三国志』において真実との距離が最も近いことは間違いない。2番目は『水滸伝』であろうか。

それはともかく『水滸伝』の「巻の四」から「巻の六」にかけて、町で泥酔して戻り大暴れしたため、五台山を破門された魯智深が開封(当時は東京とも)の「大相国寺」を目指すという話が出てくる。この「大相国寺」は現在も開封の市街地に建っており、観光名所となっている。大相国寺の歴史は古く北齊天保6年(西暦555年)に同地に建てられた建国寺を起源とする。その後、唐朝初期には役人の邸宅として使用された時期もあったが、延和元年(721年)、あらためて「大相国寺」として創建された。創建当時の山門、仏殿といった建物は、唐の昭宗時代の大順年間(890～891年)に焼失してしまったが、その後、順次再建され、開封が北宋の首都となると、「大相国寺」も全盛期を迎えた。

さて、五台山から大相国寺にたどりついた魯智深はその意に反して、畑の番人の役を宛てがわれる。当時、大相国寺の周辺では、多数のならずものやあばれものがしょっちゅう畑から野菜を盗み出していた。そうした連中が、新任の番人が来るというので、その出鼻をくじいてやろうと策略を巡らす、逆に魯智深にやり込められる。

とりわけ「巻の七」で、連中と魯智深が集まっているところ、柳の木の上のカラスがうるさいので梯子で上ってその巣をつぶしてしまおうということになった。魯智深は、梯子などいらん、と言って「しばし眺めやっつてをりましたが、つと木の前まで

歩みよりまして、衣をぬぎ、右手を下へむけますと、體を逆さにねぢ曲げた上、左手で上半分を抑えつけ、腰をばゆらりと一ゆすり、かの柳の木をば、根こそぎ引き抜いてしまひました。」連中は一斉にひれ伏して、盛んに魯智深を褒め称えた、というわけである(括弧内の日本語訳は吉川幸次郎訳『水滸伝』全15冊、岩波文庫、1947年に従う。古い版であるため、漢字・仮名遣いはママ)。現在の大相国寺の境内にはその場面を表す塑像がある。この開封「大相国寺」は『西遊記』にも登場する。



開封「大相国寺」にて(2018年8月)

『西遊記』の「第十一回」では、唐の太宗が一旦死んだものの、3日で生き返る話が出てくる。なぜ、生き返ることができたかと言うと、冥界にいた無実で処刑された多くの亡者の怨みを、金銀を渡すことで買い戻すことができたからである。その際、金銀を貸してくれたのが、現世で開封府に住む相良・張氏夫婦であった。この

夫婦は水や瀬戸物を売って暮らしを立てているが、生活費だけを残して、あとは托鉢僧にお布施をしたり、紙銭を買ってきて焼いたりしていた(金色や銀色の紙を銭の形にしたものを焼くとその煙が冥土に届いてお金なると信じられている)。そうした善果が身に集まり、現世では慈善を好む貧乏人だが、あの世では金銀を山ほど持った長者である。

現世に戻った太宗は、早速、老夫婦を見つけ出し、冥土で借りた金銀を返えそうとするが、老夫婦に固辞される。そこで返済するはずの「金銀でもって、相良のために、寺院を建立し、墓を建て、僧侶を呼んでお経をあげてもらい、こうして返済したことにするように命じました。…その金銀でもって、町の中の軍民の障碍にならない一郭に、面積五十畝(日本の三町歩)の土地を買い入れ、そこに工事を興して、寺院を建立し、「勅建相国寺」と名づけ、寺院の左側に相良夫妻の墓を設けて、…

石碑を立てました。いまの大相国寺がそれです。」(日本語訳は小野忍訳『西遊記』二、岩波文庫、1978年)と書かれている。なお、この話と前述の史実との関係は私にはわからない。

『水滸伝』、『西遊記』と続くと、残るは『紅樓夢』ということになるが、曹雪芹そうせつしんによるこの中国白話長編小説の一大金字塔の中に、開封あるいは中原を直接見つけることはおそらく難しいのではないか。もっとも、『紅樓夢』を巡っては「紅学」という専門的学問分野も存在する由、中原との関係も調べられているかもしれない。また、私の知る限り、『紅樓夢』の世界を再現した「大観園」も開封にはない。ただし、於茂世「大相国寺在此岸」(大河報社編『厚重河南』第5編、河南大学出版社、2005年)に興味深い記述を見つけた。

『紅樓夢』において賈宝玉かほうぎよく、林黛玉りんたいぎよくと並ぶ主役の1人である薛宝釵せつほうさの最も好んだ詩が魯智深による「寄生草」であるというのである。Webサイト等の情報も頼りに少し調べてみると、『紅樓夢』第22回におばあさまを中心に催された薛宝釵の誕生日を祝う会で、食事後の余興としてどんなお芝居を観たいか、参加者の希望を聞く場面が出てくる。ここで薛宝釵は「魯智深醉鬧五台山」(「魯智深酔って五台山を鬧さわがす」)を選ぶ(以下、括弧内の日本語訳は井波陵一『新訳紅樓夢』全7冊、岩波書店、2013-2014年、による)。

「こういうお芝居ばかり選ぶなんて」とチャチャを入れる賈宝玉に対して、「あなたみたいに、ここ何年も無駄にお芝居を観てこられた方に、どうしてこのお芝居のよさが分かりましょう。場面もすてきですが、詞藻(うた)はもっとすてきです」と答え、とくに芝居中の「寄生草」を絶賛して、促されるままに朗読する。題名からもわかるように、この芝居は魯智深が五台山で大騒ぎをしたため、智真上人によって破門されたことに基づく芝居であり、「寄生草」は智真上人に別れを告げる際に、魯智深によってうたわれたものである。

(大)相国寺というと、日本の京都にも「相国寺」がある。日本の相国寺(正式には相国承天禪寺)は臨済宗相国寺派の大本山であり、北山の鹿苑寺(金閣寺)、東山の慈照寺(銀閣寺)もその末寺である。明德2年(1392年)の創建で、開山は夢窓疎石、開基

は足利三代将軍義満である。創建当時は140万坪という広大な土地を領有していた(現在は4万5千坪ほど)。その名の由来は、開封の大相国寺にある(ただし、義満が左大臣であったことから、中国で左大臣を意味する相国と名づけられたとも説明されている)。日中両国の「相国寺」の間では1992年に日本の相国寺の代表団が開封を訪れた際「中国開封大相国寺と日本国相国寺締結友好寺院協議書」に署名し、仏教、文化交流を促進するための取り決めを結んだ。

四大小説以外で、中国では『三国志演義』と並ぶ人気がある物語に『楊家将演義』がある。この明代の通俗戦記小説は北宋の時代を背景として、中国北方における北宋と遼(契丹)の戦いを描いたもので、武将・楊業を当主とする楊家一門が主人公である。楊一族は『宋史』にも見える実在の一族であるが、この『楊家将演義』は創作部分が非常に多い。『楊家将演義』が日本でややなじみが薄かったのは、まとまった日本語訳がなかったことが理由であろう。幸い、最近になって、岡崎由美・松浦智子訳『完訳楊家将演義』(上・下巻)勉誠出版、2015年出版され、併せて、訳者の編になる『楊家将演義読本』勉誠出版、2015年も発売された。私もこれらの書籍から関連知識を得ることができた。

当然ながら、この演義のさまざまな場面が劇や映像作品となっているが、たとえば、京劇でも『三岔口』、『打焦贊』、『楊門女将』などがこの演義から題材をとっている。とくに『楊門女将』は、楊業亡き後、楊家の家長となった佘太君しやたいくんの命を受けて、穆桂英ぼくけいえいを中心とした楊家の女将軍が勢ぞろいして敵を打ち破るという痛快な物語である。2017年日中国交正常化45周年記念で来日した天津京劇院によっても上演され、私も6月27日夜のその公演を鑑賞できた。

時代が北宋であることから、この演義も当時の首都、開封(東京)と縁が深い。とりわけ、現在の開封市には「天波楊府」がある。これは楊業の邸宅であり、もともと開封域内の西北の隅の天波門を挟んで流れる金水河のほとりにあったため「天波楊府」の名がついた。開封はその後、長期にわたって戦乱による破壊、黄河の氾濫による水害を経験したため、大部分の歴史的建造物は地中深く埋没

した。北宋当時の「天波楊府」も例外ではなく、地上からは消えてなくなってしまった。

現在の「天波楊府」は歴史文献等を参考にして、1994年10月に復元・再建されたものである。総面積は3.3ヘクタール、建築面積は6000平方メートルあり、庭園、府衙(執務棟)、演兵場(兵士訓練場)等から成る。私が最初に訪れたのは、だいぶ以前の2007年9月15日である。下の写真は「孝嚴祠」という名称の建物で、宋の太宗からの恩賜による楊家の家廟(一族の祖先の霊を祭る祠)である。中には『楊家将演義』を彩る、楊業、佘太君、七郎八虎、宗保、文広等の塑像が展示されている。

どうやら史実からはだいぶ遠いところに来てしまった気がするが、今回の最後にもう一度史実により近づくことにしたい。宋(北宋)の復興をかけて「金」と戦った精忠報国の英雄、岳飛と開封についてである。岳飛は『宋史』に「岳飛伝」としてとりあげられたれっきとした実在人物であるが、中国、日本でも小説『岳飛伝』が書かれているようなので、歴史小説の登場人物でもある。

岳飛と開封の関係は「岳飛廟」に見ることができる。岳飛を顕彰する施設である「岳飛廟」は中国全土に見られ、浙江省杭州市(南宋の都・臨安)にあるものが有名であるが、開封市の郊外、朱仙鎮にも立派な「岳飛廟」が建てられている。これは岳飛による「金」に対する代表的な大勝利が紹興10年(1140年)、この朱仙鎮で得られたからである(「朱仙鎮大捷」)。岳飛率いる私兵軍団の大活躍により、開封をもう少しで奪還できそうになったが、紹興11年(1141年)に宋金和議が成立すると秦檜を中心とする講和派にとって岳飛が邪魔になり、逮捕して処刑してしまう。享年39歳であった。



「天波楊府」の「孝嚴祠」(2007年9月)



朱仙鎮「岳飛廟」にて(2008年3月)

全国に「岳飛廟」が建てられているのは、その後、岳飛が名誉回復されたことの証であり、逆に秦檜一派が売国奴として糾弾されることになった。「岳飛廟」には秦檜、その妻の王氏らが鎖につながれ、跪く像がつきものである。写真は、2008年3月15日に撮った朱仙鎮「岳飛廟」のそれである。かつては、「岳飛廟」の参拝者はこの秦檜一味の像につばを吐きかけるのが、習わしだったそうである。

岳飛を巡るさまざまな逸話の中でも、もっとも有名なのは、母親が岳飛の背中に「精忠報国」の文字を彫り込み励ましたという「岳母刺字」であろう。この場面を表す絵画や人物模型はやはり「岳飛廟」には必ずあるが、廟以外の場所でも見かける。写真は、2014年11月9日、開封市の第32期菊花文化節で撮ったものである。この菊祭りは、毎年秋に開封で開かれる催しで、期間中は、複数の特定会場のみならず、市内の至る所に豪華な菊が飾られている。洛陽の牡丹祭りには及ばないものの、全国的に知られた花祭りである。写真は主会場の「龍亭公園」に飾られていたものである(「龍亭公園」については本誌2020年6月号の「中原旅行記(3)」で橋詰滋氏によって紹介されている)。



開封・菊花文化節にて(2014年11月)

わりりの皆様、お久しぶりです。初投稿でいきなりキョンシーのことを言い始めました顧傑です。

本日は、前回に引き続き、「キョンシー」の由来と異聞についてお話をしたいと思います。

実は、現代人がイメージしているキョンシーは香港のキョンシー映画が作り出したものなのです。いわゆる清・明代の官服を着て呪符を貼られ、うまく歩けないのでびよびよんと跳ねながら、一列になってまっすぐに進んでいくことになります。

そして香港のキョンシー映画の由来は、これからお話しする**赶尸匠**（日本語読み：赶屍匠）の伝聞をモチーフにしたものなのです。

### ■赶尸匠とは？

赶尸匠は、70年位前まで湘西、いわゆる中国の湖南省西部に存在していた職業の一つです。

一般的には、銅鑼か鉦を鳴らしながら、黒い屍布（屍に巻き付ける布）を纏っている屍体を曳いて移動させる、生きている人間のことを指しています。

屍が多い時は、縄などで繋いで移動し、屍を安置できる場所も用意している専門の旅館までであったと言われていました。

赶尸匠は徒弟制で、屍体を扱う職業のため非常に厳しい

条件がありました。簡単にまとめますと、勇敢さ、体の丈夫さ、方向感覚の良さになります。

▼**勇敢さ**：屍と付き合うため強い心を持たなければいけません。

▼**体の丈夫さ**：年齢は16歳以上で、背の高さは170センチ以上でなければいけません。なぜかというと、階段や山を登るときは、屍体がうまく行けないときがままあります。そのときは赶尸匠

自ら担いで登らなければいけません。

▼**方向感覚の良さ**：携帯もNAVIもないため、方向を自ら判別しなければいけません。

この三点を満足させればようやく赶尸の方法が教えられます。

主には、屍を立たせる技、前に進める技、真横に曲がる技がありますが、腕のいい赶尸匠は、橋を渡らせる技、階段を登らせる技、犬に出会っても倒れない技・・・などもできました。（注：犬、特に犬の鳴き声は、陰気の濃いものを破る力が有るといわれています。そのため赶尸匠は銅鑼や鉦を鳴らし、犬や生きている人間を近づけないようにしていました。）

ですが、死んだ人の全部が動かせる、というわけでもありません。

例えば、「斬首された人」、「首を吊られて死んだ

人」、「立籠（簡体字：站笼。背より高い籠に、頭を上固定して立たせてゆっくり死なせる首吊刑に似ている酷刑）で死んだ人」には技が通用しますが、「病死した人」、「溺れて死んだ人」、「雷に打たれて死んだ人」には技が通用しません。

何故かというと、「病死した人」は、地獄の閻魔大王に呼び寄せられたからと言われ、魂魄はもう去ってしまっ

ているからです。「雷に打たれて死んだ人」は、神様が罪人と認定して審判を下したから。「溺れて死んだ人」は少し特殊で、中国だと、溺れて死んだら魂魄はできず、代わりの体を探さなければいけません。そのため、溺れて死んだ人の魂は、もしかしたら前に死んだ人の魂と引き継ぎの手続きをしているかもしれません。もし赶尸匠が法術でよみがえらせたなら、前の人転生できなくなり、怨念が更に強くなる可能性が



香港映画キョンシー映画のトップスター林正英氏(中央黄色い服 1952~1997年没) (KUNGFU TUBE から)

ありますから、技を使っではいけません。

## ■赶尸匠の神話

昔、蚩尤〔中国上古（殷・周・秦・漢の時代）の神の一人。黄帝に敗れて斬首されても戦い続けたと言  
い、また、ミャオ族のご先祖でもあります〕が黄帝と戦争したときに、多くの兵士が死んだ戦場をみて、部下に「法術を教えよう。故郷に戻らせてやれ」と言って、赶尸匠の技を教えたというのです。

実際、昔、屍体を保存する技術を持っていなかったため、戦場で死んだ人たちを普通の方法で運ぶと腐乱してしまいます。ですが、赶尸匠によって連れて戻られた屍体はほとんど腐らないため、赶尸匠たちは長い年月活躍していました。

## ■赶尸匠の仕組み

では、本当に屍体を立たせて歩かせる法術や技が存在したのでしょうか？

結論からいうと、いま私の認知の中では存在していません。赶尸匠と言いながら、手品師のような小技を使っていたのです。そしてその仕組みを暴いたのは、中国人民解放軍の軍人たちです。

1950年代、まだ国民党の人たちが大陸にたくさん残っていた時代なので、人民解放軍は共産党統治の中国での基盤を更に固めるために湖南省に入りました。ある日、若い戦士二人は、夕方まで任務を遂行しました。そしてようやく気を抜こうとしたら、雨に少し濡れた土の道の向こうから、銅鑼の音が聞こえてきました。勇気を出して確認したら、中年の赶尸匠一人と、ゆっくりあるいてくる屍体が3つありました。

怖いけど、「もしや国民党の変装かもしれない」と思った戦士たちは、少し距離をとって尾行をしました。そしてやがて夜になり、赶尸匠は普通の旅館に泊まることにしました。赶尸匠の隣の客室を取った戦士たちは、隣から「明らかに一人じゃない食事の音がした」のに気づき、お湯を飲んで隣のドアを叩きました。すると出てきたのは中年の赶尸匠でした。

「おお、戦士さん。どうぞどうぞお入りください」と中年の赶尸匠が戦士二人を招き入れました。戦士たちは礼と詫びを言いながら、客室を調べようとしていましたが、壁になにか固定されているのに気づき、近づ

いて黒い幕をめくって見たら、3つの屍体でした。戦士たちは驚きましたが、同時に違和感も感じました。

赶尸匠一人なのに、食卓には4人分の食器が並んでいたのも、もしかしたら敵を隠しているかもしれないと思いました。

敵を見つけるという使命感のためか、単純に恐怖のためか、その夜二人はずっと眠れませんでした。

そして次の日の朝、戦士たちは旅館から少し離れた場所で、

移動して行く赶尸匠たちをもう一度止めました。赶尸匠の顔を見ると、昨日の中年のおじさんではなく、もっと若い男性でした。戦士たちはもう一度屍体が纏っている布を開けて見ると、中には屍体と一緒に人間が入っていて昨日の中年の赶尸匠もいました。

結局、赶尸匠たちは、屍体を腐乱させないようエジプトのミイラのように屍体を処理していました。そして生きている人間が中に入り、普通に歩かせて屍体を運んでいました。銅鑼や鉦も、黒い屍布も、一般人を怖がらせて近づかないようにするために、本質は赶尸匠の仕組みを隠すためでした。

結局、最初は屍体を運ぶ仕事でしたが、保存技術も発達した近代に入って、次々と仕事が失われ、麻薬の運搬に手を出したこともありました。

とはいえ、古代の、運搬技術も保存技術もない時代ならではの必要性に応じて生み出された技術の一つであり、ミャオ族特有の薬や処置方法によって屍体を腐らせず長く保つ技術としては先進的だと思います。決して人を騙そうとするものではないと思います。以上を踏まえて、赶尸匠の仕組みには、少し胡散臭い部分もありますが、どうか軽蔑しないようにしていただければ幸いです。



湖南省西部での赶尸話は本当ですか？

(中国サイト「毎日头条」から)

前回は、《文中に【不(bu)】が有っても無くても、意味が変わらない文》というテーマでお話しましたが、今回はその続編です。

【不】は否定を表す最も代表的な語ですが、その次によく使われる否定詞が【没(méi)・没有(méiyǒu)】です。そこで今回は、《文中に【没・没有】が有っても無くても、意味が変わらない文》という話から始めましょう。

【没・没有】に動詞が続くときは、その動作・行為が起きていないことを表し、日本語では「…していない」や「…しなかった」と訳すことができます。【没有】は【没】と略して用いることも多く、話し言葉では【没】を使うことが多い、とのことでした。

それでは、《文中に【没・没有】が有っても無くても、意味が変わらない文》を作る2つの副詞を紹介しましょう。

●【差点儿(chādiǎnr)】：〈副詞〉もう少しで、あやうく、すんでのことで、▶ある事態が少しの差で起きるか、あるいは起きないかを表す。

この語が望ましくない事態を表す動詞の前に用いられる場合、その動詞が肯定でも否定でも結果としての意味に変わりがない、望ましくない事態をあやうく免れたことを表し、幸いなことにという気持ちを含む、とあります。例えば、『差点儿摔倒(=差点儿没摔倒)／あやうく転んでしまうところだった。』『差点儿误了车(=差点儿没误了车)／すんでのことで列車に乗り遅れるところだった。』

●【几乎(jīhū)】：〈副詞〉もう少しで、あやうく、すんでのことで。

“差点儿”の意味・用法と同様で、この語が望ましくない事態を表す動詞の前に用いられる場合、肯定文になることもあれば、“没・没有”を使った否定文になることもある、両者の意味は同じである、とあります。例えば、『船几乎翻了底(=船几乎没翻了底)／船はもう少しでひっくり返るところだった。』

このように、“差点儿／几乎”に続く動詞が望ましくない事態を表す動詞の場合、その動詞の前に“没・没有”が有っても無くても文の意味は同じで、「幸いなことに望ましくない事態をあやうく免れた」という気持ちを表すことができます。

それでは、“差点儿／几乎”に続く動詞が望ましい事態を表す動詞の場合はどうなるのでしょうか。このときは動詞の前に“没・没有”が有ると無いとでは意味がまったく変わってしまいます。

●動詞の前に“没・没有”が有る場合

『我去晚了，差点儿没见着他／遅れて行ったので、もう少しで彼に会えないところだった。』

『这书卖得很快，差点儿没买到／この本はとてよく売れるので、あやうく買えないところだった。』

『事情几乎没办成／話がもう少しでだめになりそうだった（実際はまとまった）。』

●動詞の前に“没・没有”が無い場合

『他的成绩不错，差点儿就考上大学了／彼の成績はかなりよいが、もう少しのところで大学に合格しなかった。』

『我差点儿就买到电影票了，早来一会儿就好了／私はもう少しのところで映画の券が買えなかった、もう少し早く来ればよかった。』

『事情几乎办成了／話がもう少しでまとまるどころだった（実際はだめになった）。』

このように、“差点儿／几乎”に続く動詞が望ましい事態を表す動詞のとき、その動詞の前に“没・没有”が有る場合は、「望ましい事態が実現しそうななかったのに、幸いなことに実現した」という気持ちを表します。逆に、“没・没有”が無い場合は、「望ましい事態が実現しそうだったが、惜しいことに実現しなかった」という気持ちを表すのです。

ちょっと複雑な“差点儿／几乎”の使い方ですが、会話の途中でとっさに使い分けるにはどうすればいいのでしょうか。私はこうしています。

「幸いなことに…」の場合は“差点儿／几乎+没…”、「惜しいことに…」の場合は“差点儿／几乎+就…”と。

後半は、【不】と【没】、2つの否定詞についておさらいしておきましょう。

“不+動詞”は《意志と習慣》の否定を表します。“去”「行く」という動詞を例にとると、“不去”は「行かない」です。

“没+動詞”は《動作の実現、行為の存在》の否定を表します。“没去”は「行かなかった・行っていない」です。

“去”に《完了》を表す“了”を加えて“去了”とすると「行った」です。

それでは、“不去了”は？「行かなかった」ですか？「行かなかった」は“没去”です。“了”は、《完了》を表すほかに《状態の変化》を表す働きもあり、“不去了”は「行かない」という状態に変わった、すなわち「行かないことにした」ということです。

勘違いしやすいので、覚えておきましょう。

# グスタフ・マーラーへの想い 木村博美

一世紀前の現代音楽家であるマーラーは日本でいえば明治時代に活躍した作曲家であり指揮者でもある。1860年プラハとウィーンの間にあるカリシュトに生まれ非凡な才能を発揮した。読者の皆さんも一度は彼の音楽を耳にしたことがあるのではないかと思う。私はアマチュアのバイオリニストであるが、彼の音楽に感動したのは20年前のこと。私の音楽仲間の強い勧めで全集を借りて聴いてみたのだが、正直当時は長くけたたましい煩い音楽だというのが第一印象だった。しかしながらその一年後交響曲第3番を聴いていた時に彼の音楽に心を驚掴みにされた心境だった。後述するが第6楽章の静かな入りと高揚する最後のエンディングに圧倒された。

私は単なるアマの愛好家ゆえに専門的な知識はないが、エピソードをいくつかご紹介する。

## ■チェコ訪問

今から15年前息子がポーランドに留学していたときに隣国のチェコを女房と訪問した。プラハから西にバスで3時間の行程。150年前の白壁の家がほぼそのまま残っている。隣には彼の博物館があったが残念ながら閉館していた。6歳のころ生家カリシュトより約30キロのイーグラフに引っ越しをする。

家の入口に近づいた時には少し震えた。当時小学生の彼が毎日ここで家族と住んでいた息吹が感じられた。父親は酒癖が悪く子供たちもなつかなかったらしい。

そして毎日通った小学校までの通学コースを歩いてみたが、わずか10分足らずの通学中でも頭の中は旋律が飛び交っていただろうか。歩きながら持参したCDで交響曲3番を聴いていた。街の中央にある市電停留所が目止まった。ここの信号機の音が3楽章のポストホルンの旋律の原曲と思うとぐっときた。又是非訪問したい場所No.1である。

## ■マーラー孫娘来日

彼は欧州の美女と言われたアルマと結婚し二人の女の子を授かるが長女は数年で病死している。次女は建

築家と結婚し何人かの子供がおり、その中の一人つまりマーラーにとっては孫娘が20年ほど前に岡山県津山市での音楽祭に参加するために来日したらしい。この時筆者は海外出張中で逢えなかったが、これが心残りだ。写真を見るとおじいさんの風貌が残っている。

以前はマーラー国際協会なる団体に入っていたが、活動拠点が欧州であり又活動内容と合わなかったので退団した。また機会があれば参加してみようと思う。

## ■各交響曲の感想

彼は9曲と未完の10番及び大地と合計11曲もの作品を残したが私の感想及びコメントを記す。ワーグナーやブルックナーからどのような影響を受けたのかなどを知りたい人は何冊もの解説書が出ているのでそれを

参考にされたい。

●交響曲1番(巨人)：最も人気のある作品ではなかろうか。それゆえ日本では頻りに演奏されるので、皆さんもきっと聴く機会があったのではと思う。聴きどころは第3楽章のコントラバスがマルティン兄さんと言われる民謡を独奏、これにいろんな楽器が重なり合う(この愛らしい旋律きっと覚えておられるだろう)部分、最後の4楽章ではホルン全員が立ち上がって主題を奏で熱狂的に終わる。ホルンを吹いたことのある筆者も

興奮して立ち上がる気分になる。

●交響曲第2番(復活)：多分1番の次によく演奏される作品であり、初めて声楽を導入したベートーベンの第9を意識したものともいわれる。第1楽章の開始は低弦のトレモロによるがこれは強烈だ。第2楽章はとにかくメルヘンの世界。面白いのは第3楽章で子供の角笛という歌曲の中で聖人が魚にお説教する部分で目の前にその光景が広がる。第4楽章でアルトの独唱が壮烈な第5楽章を導く。マーラーによると最後の審判が下り人々は逃げ惑う断末魔である。最後に彼は「我は死なん。しかし生きんがために甦る」としめくくる。

尚多くの指揮者による録音があるが、何といてもオスカーフリードが1905年マーラー立ち合いの下、ベ



1892年のマーラー (ウィキペディアから)

ルリンで初演を行った時の版がお勧め。何せ作曲者自身が立ち会っているのだから彼の細かな指示は加味されているはず。私はこの演奏を聴いているとマーラーがこちらを睨んでいるように感じる。録音技術悪いが是非お勧めしたい(Naxosの歴史版)。

●**交響曲第3番**：大編成を伴う大作品ゆえに滅多に演奏されない。実は私の最も好きな作品である。その中でも6楽章は私の魂であり分身でもある。どんなに落ち込んでいてもこの楽章を聴けば癒される。私にとってバイブルだ。15年前にマーラー作品を専門的にやるオーケストラに所属してこの作品を演奏したが第6楽章では毎回涙が止まらなかった。周りの仲間たちも泣いていた。それほど彼の音楽は強く惹きつけるものをもっている。

第1楽章は8本ものホルンのユニゾンによって始まる。途中トロンボーンが第2主題を独奏するがこれは珍しいことだ。長い展開の後、最後に野生馬が疾走し駆け込むようなけたたましいエンディングがたまらない。

第3楽章が前述した馬車の発車信号にヒントを得たといわれる部分であり、舞台裏でポストホルンが奏でる単純素朴な旋律は心を打つ。4楽章はニーチェのツアラトウストラの一節をアルトが歌い第5楽章の児童合唱が受け継ぐがやるせない哀歌である。そして筆者の最も好きな第6楽章に入っていく。マーラーはこの楽章を「神が私に語ること」と名付けた。

静かに弦の旋律を管楽器で浄化、高揚していくプロセスだが、これは私の下手なコメントはいらない。まず聴いてみて欲しい。最後のエンディングは巨神の踏みしめる足音のようなティンパニによって閉じられる。

●**交響曲第4番**：小編成で演奏される可愛いメルヘン世界を描いた作品だ。ユニークなのは第2楽章で、死神の不気味な踊りをバイオリンの高音で奏でる部分だ。通常コンマスは調弦をあらかじめずらした音程のバイオリンも用意している。彼の作品は、とにかく長く緊張感をもって聴く作品がほとんどだがこれはゆったりと落ち着いて聴ける清涼剤だ。

●**交響曲第5番**：これも人気のある作品だ。第4楽章アダージェットの静かで甘美な旋律をアルマ夫人に捧げる求婚の曲である。あのヒットした「ベニスに死す」の映画のテーマ曲になっている。しかし、筆者はこれよりも第2楽章の方が好きだ。

マーラーが指示した嵐の激動で始まり数分後チェロが甘い旋律を奏でる。愛くるしい旋律が次々と展開されるスケルツォ。西欧演歌だと揶揄する者もいるが聴



練習中の木村夫妻

衆を感動させれば理屈理論は要らない。

●**交響曲第6番(悲劇的)**：多くの打楽器を駆使して描く作品だ。第4楽章で木製のハンマーが床を思い切り叩く瞬間うつらうつらしていた聴衆も目覚める。筆者はそれほど感動しない作品だが、以前プロの音楽家にアンケートしたらNo.1の評価だった。理由はいろんな意味で纏まっているとのことだが、それでは本来のマーラーらしさに欠ける気がする。3楽章はそれほど主張しない控えめな美しさだ。

●**交響曲第7番(夜の歌)**：ギター、マンドリンも加えた新たな音楽を模索したのであろうか、5番までのマーラーらしさが抜けてきた感じがする。しかしこれには異論を唱える私の音楽仲間は結構いる。この曲が夜の歌と言われる由縁は幻想的で夜の雰囲気に満ちているからで、第5楽章で朝の太陽が昇るというが私にはあまり理解できない。いずれにせよ実際に弾いてみて各楽章ともに相当エネルギーを要する魅力的な作品の一つであることは間違いない。

●**交響曲第8番(千人の交響曲)**：言うまでもなく最大の作品である。150人ものオーケストラに850人の合唱団と8名の独唱者で演奏する。従って日本でも数年に1回ぐらいしか演奏されることはない。私も数年前に一度チャンスがあったが逃してしまった。

CDはいろんな指揮者の演奏を聴いているが、実際の演奏経験もないので簡単なコメントにしたい。作品は変則的な形式で第1部と第2部に分かれる。第1部では「来たれ創造主なる精霊」というテーマでソロ歌手が歌い、第2部ではファウスト終幕からのテーマで最後はあらゆる罪と救済を感動的に歌いあげる。第1部に関して言えば、あまり魂を込めて聴いていないせいか、それにほとんど歌唱が主役を占めるのでオケ演奏に集中する筆者はそれほど感動を覚えない。先日このコメントをしたら音楽仲間からそれは実際に演奏していな

いからですよとくぎをさされた。これに反して第2部はオケ中心の展開で最後にあらゆる罪と救済を歌い上げる部分は2番の復活を連想させる。

●交響曲第9番：今では第3番同様大変好きな作品である（特に第4楽章のアダージオ）。マーラーはこの曲を作曲中は体調も衰え死を意識していた。現実はこの後逝去しており彼は実際に聴くことはなかった。無念だったのであろう。初演は弟子のブルーノ・ワルターが死後一年経ってウーンフィルで演奏した。その演奏は、録音がいまいちだが、マーラーの指示を忠実に受け指揮をしたはずなので本物である。日本での演奏はかなり遅れて筆者がまだ大学生のころ昭和42年コンドラシン指揮のモスクワフィルが東京文化会館で初演奏した。勿論聴いていない。

1楽章の最後のコーダは美しい。やるせない。2楽章はレントラー風（ドイツの民族舞踊）と指示があり、そして3楽章はロンドブルレスケ（おどけてユーモアたっぷり）を念頭に聴くと目の前にボヘミア地方ののんびりした光景が浮かぶ。さあ筆者一押しの4楽章だ。下手な説明は要らない。まず聴いて欲しい。これほど聴衆、演奏者を感動させる旋律は他にはない。途中何度も高揚しそして引き潮のごとく退去した浮かびあがり最高点まで高揚する。演奏者としては何度も失神するぐらいだ。前述の第3番6楽章が静の王者ならこの第9番4楽章は動の王者だ。

You Tube でマーラーと入力し交響曲第9番4楽章とインプットすれば聴くことができる。

●交響曲第10番：彼が作曲したのは第1楽章のみで、2, 3, 4, 5楽章はスケッチラインしか残っておらず弟子と作曲家達が類推して完成させている。但し実際に演奏されるのはほとんど第1楽章のみである。

聴いて頂くとすぐわかるが、今までの彼の作品と音調が違う。まるで別世界に入った気分だ。力強く歌い訴えることもないし淡い霧の中に浸っている。個人的には今はまりそうな作品だ。なんともいえず心が洗われる。この不思議なふわふわ感をなんと表現すればいいのか。この作品も彼の死後1924年にシャルク指揮のウーンフィルが初公演した。

### ●大地の歌

この作品は第9番より前に書かれているが、マーラーが常に死を意識して9番を完成してそれで終わったベートーベンやブルックナーのことを思うとこの作品に9番という番号をつけることができなかった。筆者が演奏経験を持たない作品であるが中国との関係があ

るので少し触れておく。彼がこの作品を書く動機となったのはハンスベートゲがドイツ語に翻訳した中国詩の中国の笛に触れたからである。これは李白、孟浩然などの詩を適当に織り交ぜて独語に翻訳したものらしい。

1楽章は大地の悲しみに寄せる酒の歌がテーマ。“生は暗く死も暗い”テナーが歌う。“金杯の酒は我らを招くが飲むのは待て。我まず一曲歌おう”“大地は永遠に揺ぎ無く春になれば花が咲く。片や人間は生きられるのか。この慰めに金杯を飲み干そうではないか”と自暴自棄になる。

2楽章は秋の寂しさで”太陽はもう輝こうとしないのか”で終わる。3楽章は打って変わって明るい主題（青春について）で5音階を使った中国的響きになるとあるが、何となく東洋の香りがする。4楽章は美についてであるが池の周りの睡蓮の花を摘む乙女たちを歌う。5楽章は春に酔えるものとあり“人生が幻にすぎぬなら酒に溺れよう”6楽章告別である。死を意識したマーラーが“私の人生に幸せはなかった。しかし愛する大地は春に花が咲き永遠に輝きわたる”この独唱にオケは永遠に消え入るように結ぶ。厭世観に満ちた人生の最後を締めくくる近代音楽の巨匠の大作である。

### ■その他雑感

彼の作曲スタイルはユニークで夏休みに南オーストリアの別荘に閉じこもり作曲に専念した。大変神経質で扉は閉じており食事もおっそりホテルの食事係が置いて行ったらしい。疲れると別荘裏の湖で水浴をした。猫が大好きだったらしく癒されたらしい。そんな場面なんて想像もできない。

彼には多くの弟子や信奉者がいるが、例えばシェーンベルグ、ベルク、シャルク、クレンペラー、ブルーノ・ワルター。なおあのR.シュトラウスも彼と親交があった（同時代の作曲家で良きライバル）。当然ながらワーグナー、ブルックナーなどからは多くを学んでおり、その作品も少なからず影響を受けている。ワルターは同じユダヤ人からか大変可愛がってもらったとある。年齢差は16歳でマーラーが助手を探しておりその面接で気に入られた。その質問は“君は僕の作品のピアノ伴奏できるかい”で回答は勿論Yes。あの第9番をマーラーから直々指揮をするように言われた。

マーラーは、数世代前からボヘミアに移住した多くのユダヤ人の子孫である。ボヘミア人はチェコにとってみれば田舎者で、そのチェコはドイツにとっては後進国で、且つユダヤ人は世界の中でのマイノリティであると常に劣等感に悩まされていた。

★嬉しいことに、早速「広場」にお便りをいただきました。匿名ご希望と言うことで、お名前は伏せますが以下のようなお便りです。

#### ◎私の意外な発見：（匿名希望読者）

河野さんってわりりの新年会で手品を披露された方でしたっけ…？「中日辞典からの意外な発見」（わりりい 253号・255号・257号）、というより私個人としては、「河野さんという人の意外な発見」でした。

##### ○253号からの意外な発見

自分自身の恥を曝すことになりますが、中国語の子音 21 文字のうち、有気音の 6 文字は何となくわかりますが、それ以外の残りはすべて無気音だと思いついていました。ですから、無気音で始まって（-n, -ng）で終わる漢字の第 2 声は、わずか 3 字しかないときいても、ええ～!? 私の知っている簡単な漢字の -n, -ng で第 2 声があります。神(shén)／行(xíng, háng)形(xíng)／王(wáng)等々。中国語を始めたばかりの頃、口の前にティッシュを垂らして発音し、紙が動けば有気音、動かなければ無気音だ、と習った記憶があります。そんなわけで、有気音、無気音を正しく理解していなかった私には納得できなかったのです。

##### ○255号からの意外な発見

ひとからの受け売りを、それを知らないひとに、得意になってひけらかす悪い癖が、私にはあるようです。

『日本語の漢字を音読みしたときに、語尾が「ん」になれば「-n」、そうでなければ「-ng」で識別できる。でも、太っているという意味の胖(pàng)だけは例外。』と言っていました。胖に「安らかである」という意味があり、(pán)と発音することを知りませんでした。

河野さんのように半世紀には遠く及びませんが、私も中国語を始めてから何年にもなります。未だに初級クラスです。認知症の進行を多少でも遅らせることが可能なら、と今まで続けてきましたが、最近、もうそろそろ終わりにしようかと思いついて悩んでいます。

た。でも、253号と255号の河野さんの「中日辞典からの・・・」を興味深く読んで、もうちょっと続けてみようかなと考えが変わりました。

★もう一つは、先月ご紹介した四川省でご活躍の大川さんから頂いた、11月号をご覧になっての感想を紹介させていただきます。

#### ◎四姑娘山の大川健三さんから

「遅くなりましたが'わりりい 2020年11月号'を大変面白く拝読させていただきました。ありがとうございます。

表紙で丹巴の中路に住む女の子の写真を紹介して下さり、ありがとうございます。キャプションにこの女の子の顔立ちを印象的だと書きましたが、欧米人にも強くアピールするようで、別の写真ですが、米国の山岳情報データベースでもチベット族の女の子として人気を博しました。

村上直樹さんが書いておられる「河南省或いは「中原」 雑感— 7」を何時も読ませて頂いています。今回の「三国志と河南省」は取り分け興味深く拝読させていただきました。やはり自分が住んでいる場所に関わるからだと思います。これからも楽しみにしております。

後藤芳昭さんの「是知也」のお話は展開が軽快でスッキリしていて大変面白かったです。

「みんなの広場」で私の感想をご紹介下さりありがとうございます。お役に立てば幸いです。

「編集後記」で触れられたコロナ感染について、影響がこんなに深刻に長い期間世界中に広まるとは思っても見ませんでした。社会体制が違って、やるべき事は果敢に実行しなければならないと日頃から強く感じております。

次号を楽しみにしております。

■皆様の投稿をお待ちしております。

Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp

郵便は:町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方「わりりい」



## 【わんりいの催し】

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。\*

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：'20年12月22日(火)10:00～11:30  
'21年1月19日(火)10:00～11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

### ❖❖ 中国語で読む 漢詩の会 ❖❖

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：2020年12月13日(日)  
2021年1月17日(日)  
いずれも10:00～11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師

- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)  
Email:ukiuki65jppj@yahoo.co.jp

(有為楠)

#### ■12月定例会

▼12月08日(火)13:30～  
三輪センター 第三会議室

#### ■'わんりい' 発送

▼'21年1月号発送は  
12月28日(月)10:00～  
三輪センター 第二会議室

### ——編集後記——

コロナ禍ですっかり様変わりしてしまった2020年も残すところ1か月となりました。

聞くとところによると、ウイルスは人類の誕生よりも前からこの地球上に存在しているのだそうですね。昔から風土病と言われる、地域的に限定された病気も、その土地に適したウイルスが悪さをすることが多かったようです。

人類の活動範囲が広がるにつれて、地域を選ばないウイルスが誕生するようになり、時折パンデミックが発生するのです。そのたびに人類はウイルスに打ち勝つ方法を探り当て、以後の発展に活かしてきました。ウイルスとの戦いが人類の進歩の上で大きな役割を果たしたのだそうです。

皆さんにとって、2020年はどんな年でしたか？今までになかった生活を強いられて、新しい事態に直面したとか、見えなかったものが見えるようになったとか、新しい発見がありませんでしたか？

～・～・～・～・～・～

'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし  
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年会費1000円。  
■問合せ：044-986-4195 (寺西)

### 'わんりい' 259号の主な目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(38)東窗事発      | 2  |
| 「日译诗词」(8)王維の五言絶句・二首   | 3  |
| 「漢詩の会」たより(43)王勃       | 4  |
| 中国の歴史を彩る美人百花(5)       | 6  |
| 「中原」雑感(8)歴史小説と開封・大相国寺 | 8  |
| 中国の面白い神話物語(2)         | 11 |
| 「中日辞典」からの意外な発見(4)     | 13 |
| グスタフ・マーラーへの想い         | 14 |
| みんなの広場                | 17 |
| 'わんりい'の催し・入会案内        | 18 |